

武蔵野台地東部における 1100 年海進

磯貝富士男 (大東文化大学名誉教授)

The sea of the east Musashino Plateau in the 1100 Submergence

Fujio ISOGAI

1、課題

本稿は、1100 年海進期における荒川低地の海域化範囲を明らかにした前稿を引き継ぎ武蔵野台地東部への海域進入範囲を考察しようとしている¹。この範囲は山の手台地とも言われ²、ここに入り込んでくる海域は、荒川低地・東京低地・江戸湾・多摩川低地の 4 方向から想定される。東京都 23 区は近世武蔵国行政区分の荏原・豊島・葛飾・足立の 4 郡に跨っているが、今回対象になるのは荏原・豊島 2 郡である。伝承類と明治期の地形図等を手がかりに考察する。

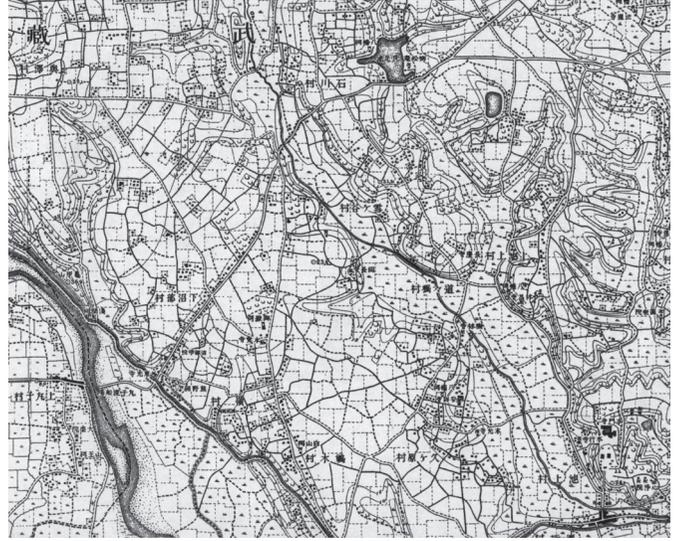
2、荏原郡域における海域浸入状態

『新編武蔵風土記稿』2 (以下風土記稿と記す) は荏原郡奥沢村 (世田谷区奥沢) の東側に海が入り込んでいたとする伝承を残している³。村内の小名「朝鮮丸」の注記に次がある。「村ノ東ノ方大音寺ノ後ニアリ。一二朝鮮山トモ呼ヘリ。相傳フ、往古コノ邊入海ナリシ頃、朝鮮國ノ船コ、ニテ沈ミシユヘ名トセリト。オホツカナキ説也」。往古この辺りが入海だった頃、朝鮮国の船がここで沈むという事故があったので、この地名が付けられたとのことである。時期についての限定的記述はなく、編者は「覚東なき説」だと評しているが、現地まで行ってそこを見ているわけではない。海水面変動について確たる認識がない風土記稿編纂者達の判断は無理もないことだろう。1100 年海進を確認してきた筆者にとっては、この事例も 1100 年海進期に海がこの地まで入り込んでいた事実を伝える貴重な伝承として受け取ることができる。入江奥での難船の伝承としては前稿で一例を挙げた。「浦和」地名が幾重にも湾曲し入り込んでいる海岸線地形に因んでいることの指摘に関連して挙げた隣村別所村十羅刹社創建伝承である。辺り一円が江河だった時代に運漕船が難破し溺死者多数を出したためその地に追福施設を建設したとの伝承である。深い入江の奥では、大潮の満潮時等には急速な流れが生じ風難等が加わると難破しやすかったのであろう。1100 年頃の王朝名は「高麗」であるが、後世沈船を「朝鮮国」のものと同よぶようになるのは自然なことだろう。朝鮮丸の位置については大音寺の場所を基準にして確定できる。村の中心から見て東方向に大音寺があって、入海はその大音寺の後に



地図1 武蔵野地東部海域伝承分布(陸地測量部、明治21年輯製製版同34年修製改版20分1の1東京) 1朝鮮丸、2池上道、3不入斗村磐井神社、4古川村薬師堂前入江、5矢口村入江、6鷯木村光明寺池、7東山貝塚、8上渋谷村の海、9豊島入江、10小石川入江、11、新堀村青雲寺繫舟松下の海、12海岸線牡蠣殻山、

ありというのも村の中心からみでのものと判断できるので、朝鮮丸はその大音寺の東側にあるということになる。大音寺は今でも世田谷区奥沢 1 丁目 18 番に存在し、北隣の奥沢中学校とともに南北に長い台地上にある。位置は大局的に今も変わっていないようである（明治 14 年迅速図では武蔵國の「武」とある場所で寺名表示なし）⁴。東側を呑川（石川）が南北に流れ、近くに島畑橋が架かり東側は大田区石川町 1 丁目である。1100 年海進時にはこの呑川沿いに海が入り込み、現大田区の中を貫いて世田谷地区前まで及び奥沢村東方の水田地帯が最奥となったので



地図 2 奥沢村から呑川沿いに池上村へ
（陸地測量部、明治 14 年測量同 18 年製版同 20 年出版同 24 年再版 2 万分 1 二子村）

であろう。大音寺台地東縁に沿ったこの低地は現在西の世田谷区と東の大田区に挟まれているが、どちらにも属せずここ緑が丘駅南側の地だけが北から入込んだ目黒区に属し、目黒区緑が丘 3 丁目である。

呑川周囲に広がる水田地帯は往時の海域を示すと考えられるが、下流東南方向にある池上村から西北に向って伸びてきて、雪ヶ谷村の下、石川村の下を経て奥沢村東の水田へと繋がっている。各地点の明治初期における標高を迅速図によって見ると、池上村内で 5m 以下であったが北部で 5m 等高線を超え、雪ヶ谷村下で 10m 線を超え、石川村地区で 15m 線を超えて当該地区に至っている。島畑橋辺りの陸地の標高が 15m を超えていることは、前稿荒川低地の検討で目安とした 10m よりも較差が大きい。これは 1100 年海進期以後の沖積作用や人為的埋め立てなどによる嵩上げ規模が、この地ではより大きかったことを示している。沖積作用には上流からの土砂運搬と両山側からの土砂崩壊の二つが考えられるが、後者も大きいだろう。貝塚爽平によると⁵、「呑川、目黒川、渋谷川、神田川などの下流部」では「樋状の谷底」となっていて「砂泥、ところによっては泥炭よりなる沖積層」がたまって「下流では厚くて、10m をこえるところも少なくない」とされている。今日に至るまで自然的・人為的要因による沖積作用によって 15m 近い嵩上げが生じていると考えざるをえない。この間の沖積作用その他による土地の底上げによる地形変化の甚だしさについては、風土記稿にも言及がある。編者は奥沢村の沢は「郡内七沢」の一つに数えられたという話を聞いて、昔はよほど深い沢があったのだろうとの思いを深くし、奥沢新田村はこの村から分離したものであるとそちらに沢跡があるのかもしれないと探しても「サセル高低」はみえないとして「イツノ世ニカ變革アリシモ知ルヘカラス」と述べている。「變革」によって「今ハオシナヘテ平地ノ村」となっていると述べた対象は奥沢村や奥沢新田村についてであるが、さらに荏原郡全域にも通じる言葉でもあった。

1100 年海進期に奥沢村東まで海域が及んでいたことは、他の同程度海拔の谷奥でも海域が及んでいた可能性を示唆する。呑川低地の水田地帯は奥沢村東側に至る途中の上池上村の南で左右の谷に分かれる。左に行くと奥沢村東だが、右に分岐し上池上村に入った低地はさらに左右に分かれる。

このうち左＝北西方向に延びる低地はさらに北上し奥に洗足池が存在する。洗足池は前述の奥沢村東側朝鮮丸の東方でほぼ同緯度にある。1100年海進期に奥沢村東側まで海域が及んでいたとすると、現洗足池辺りも枝分かれした入江の最奥であった可能性が浮上してくる。迅速図では洗足池南側の岸上に戸越村から丸子橋船場に向かう道路が通っていてほぼ海拔20mになっている。現在も池の南側は中原街道が通っている。道路で仕切られる以前に灌漑用水池のため土手ができていたのかもしれない。それは南側低地を水田利用した時に、この部分を切り離して灌漑用水のための貯水池にするためのものだったのではないか。二つの入江に挟まれた石川村・雪谷村・上池上村（現仲池上）のある台地は、海に突き出した岬のような景観をなしていたであろう。

以上の如く奥沢村東方朝鮮丸や現在洗足池のある辺りまで海域が及んだとすると、そこに至る途中の呑川低地は当然のこととして海域化されていたと想定される。そのことに関して、まず池上村の低地が広範囲な池であったという伝承の存在が注目される。池上村（大田区）は新井宿村の西で池上道の北側にあつて、東側には本門寺の岡が聳えるという立地状況にあるが、風土記稿には村名の由来について「千束池ノ邊ニアル村ナレハコノ名起レリト云」とある。さらに「往古ハコノ地甚タ濶クシテ、本門寺ノ山麓マテモ池中ナリシトソ。今ニ村北馬込村ノ境ニアル千束池ハ纔ニ其形ノ残レルナリ」とある。往古池上村の低地は広大な池で、水域は本門寺の山麓まで及んでいたというのである。また村の北方にある馬込村との境に存する千束池は、広大であった昔の千束池が僅かに残ったものだと述べている。この点は池上村内「内池」の地名の由来についても言及がある。「本門寺ノ西ニ値レリ。土地打開ケテスヘテ水田ナリ。コレ往古千束ノ池ノ跡ナル故コノ名起コレリトイフ」。「内池」は往古存在した広大な千束池の痕跡だというのである。今の洗足池は上述の大田区南千束2丁目の小規模な池を指し、池上村地区に及ぶ広大な規模だったようには見えないが、このかつては広大な規模に及ぶ千束池が存在していたとの認識はかなり広くいきわたっていたようである。編者が続いて「今ニ村北馬込村ノ境ニアル千束池ハ纔ニ其形ノ残レルナリ。カ、ル大池ノアル地ナレハ、當村ノミニモアラス池尻池澤ナトイヘル地名モ皆コノ池ヨリ起リシナリト云ヘリ」と述べているのは、その池が往古は北方上流にある今の千束池にまで及んでいたとの認識にあったことを示している。池尻池澤の地名にも言及している点については、これを目黒川上流の池尻・池澤二村の地名に結びつけるのには無理があるが、この近辺にある別の村名を指しているとしたら受け入れられる。これらのことから、本門寺西側を北上する呑川両側に広がる低地のほぼ全域にかけてかつては広大な千束池が広がっていたとの想定を可能とする。これはあくまで広大な千束池の存在を語る伝承であつて1100年海進期の海域を語るものではないが、海退後の一定期間に海域だった跡が広大な池として残っていた状態が人々に記憶伝承されていたと見なせるだろう。以上から次を想定できる。1100年海進期には海域が南方から池上村水田地帯に入り込み、呑川低地を遡り奥沢村東部や現洗足池まで及びその辺りが海域最奥をなしていた。その後海退が進む中で呑川低地が広大な池として残され千束池の名でよばれていた。さらに海退が進行し呑川低地が開発水田化され千束池の最奥が灌漑用水池ととして残され、千束池の名称は小さな池の名称となった。

江戸時代「池上道」と呼ばれた脇往還は、南品川宿で東海道から別れ、大井村―新井宿―市ノ倉村―堤方村―徳持村―下丸子村と来て、多摩川を渡り稲毛領に通じていた。この池上道について、かつては東海道の本街道であつて東側には海が広がっていたという伝承が残っている。池上道に沿った村々の幾つかにはそれに関する伝承が残されている。不入斗村（大田区）は「海邊ノ地」であつた。明治初年の2万分の一迅速図ではそのことが明確に分かるが、今はそれほど明瞭ではない。

その村域にある笠島はかつて海中にあった島で古歌に詠まれた名所「新井カ崎ノ笠嶋」であると伝承されていた。風土記稿編者は「サレトソノ地ノサマイトセハクシテ、且フルキ地景トモミエサレハ、覺東ナシ」としている。新井宿村については現在も池上通りに「新井宿」の地名がある（大田区中央1丁目辺り、近くに入新井二小あり）。村内の小名に「根岸」があるのは、海域が及んだ時でもそこは陸地が維持されていた場所だったからではないか。古老の話によると「昔ハ此村（新井宿村）海岸にそひてありし」とあって、風土記稿編者は「其頃は海道も村内に懸りしならん」と判断している。それに関連して古歌に詠われている「新蘭ヶ崎」「新蘭ヶ磯」とは「此所ナリト」とする古老の話を記す。そこで挙げられている和歌は古代・中世のもので、「万葉集」以来の「信實ノ歌」、「夫木集」爲家の歌、同集今出川院兵衛の歌、「續後撰集」源家長ノ歌、宗祇『東路記』などである。この内1100年海進以前のは750年代成立の『万葉集』巻12の「草陰の新蘭の崎の笠島を見つつか君が山路越ゆらむ」（3192）である。このことは、この地が海岸に面して「新蘭の崎の笠島」が名勝として知られていたのは1100年海進期のことだけではなく、それ以前以後を通じてのことだったことを示している。また「新蘭崎舊蹟」について次の現地の話を紹介している。「今八景坂より望み見る村内及び人家のある所は、古は総て海にて、その頃の海道は桃雲寺善慶寺などの背後の岡上にあつたといふ。岡の形左右の翼をひらきたる如く出張りたる所古へ海岸の出碕にて、これを荒蘭ヶ崎と號す」と。八景坂は、迅速図では東海鉄道の大森停車場西側を北上する池上道沿いにある西北に上る坂である。現在は大森駅前に当る。池上道は西方から、堤方・市野倉・新井宿の村々辺りから大森停車場に至るまでは海拔5m等高線より低い所を通ってきたが、大森停車場の西辺りまで来て崖上に上る形になっている。崖上へは海拔5m以下の位置から海拔

15mを超える所まで上る。そのあと台地上の東縁辺を通っていくが、台地上はこの区域だけである。その後北進して少し下る（渡河点で5m）。凹凸はあるが低くても海拔5m以上を維持しているが、南品川宿で東海道に合流する辺りでは5m以下となっている。「古は総て海」だったと言われた「八景坂より望み見る村内及び人家のある所」を見ると⁶、八景坂の崖下の地域には鉄道が通っている以外は水田だけで村落や人家を確認できない。人家は大森停車場南西の池上道と善慶寺などがある台地との間に多く、新井宿村と記載されている左側春日祠のある辺りまで来ると道の両側に分布している。この区域は海拔5m以下で、「古は総て海」と記されていることに合致している。「その頃の海道は桃雲寺・善慶寺などの背後の岡上にあつた」ということは、かつては大森停車場の西で坂を下らず、台地上を善慶寺のある辺りまで通じていたこと



地図3 池上道（陸地測量部、明治14年測量同18年製版同20年出版同24年再版2万分1二子村と明治14年測量同18年製版同20年出版同24年修製再版2万分1品川驛を合成）

になる。台地は途切れ途切れで次の台地との間には10m以下の低地があり、それを超えても本門寺の台地そして低地とあって、海進頂点期には今の池上道の道筋が東海道でありえるのは無理だったと思われる。これは、池上道の東側域だけでなく街道が通じている場所そのものまで海域化していた時期があったとの伝承である。池上道が通っている場所が陸地で東側が海だった時期と、池上道のある低地の縁まで全部海域化していた時期と、時代を分けて考えるべきであろう。低地の縁の池上道も海域化して台地上に移らざるをえなかった時代こそ1100年海進期に当たるが、池上道が海沿いの街道で東側に海が広がっていたという時代はさらに1100年海進期以前と以後と二つに分けることができる。まず池上道が海岸線の低地の縁で台地の裾を通過していたのは1100年海進期より以前からのことで、少なくとも万葉集時代にまで遡れること。その状態は1100年海進前まで続いたが、海進期になると海水準が上がり低地の縁も海域化して街道は台地上に移されることになる。ただ、この時期に本街道がその台地上にあったか、或はもっと奥の台地に移されたのか断定できない。1100年海進期を過ぎパリア海退が進行する中で、一部を残して元の低地の縁(台地下)を通る今の池上道が陸上となり、本街道に戻ることになる。弘安5年(1282)9月池上が身延から常陸に向かう途次の日蓮終焉の地となったのは池上道が通行できたことが背景になっていると考えられる。初めは海に沿った道と言う景観だったが、さらに海退が進行すると街道の海側には海中に蓄積された砂地が現れ寄せ洲の発達が甚だしい状態となっていく。海退の底1450年前後頃、東海道本街道は新しい海沿い道に移されたのであろう。

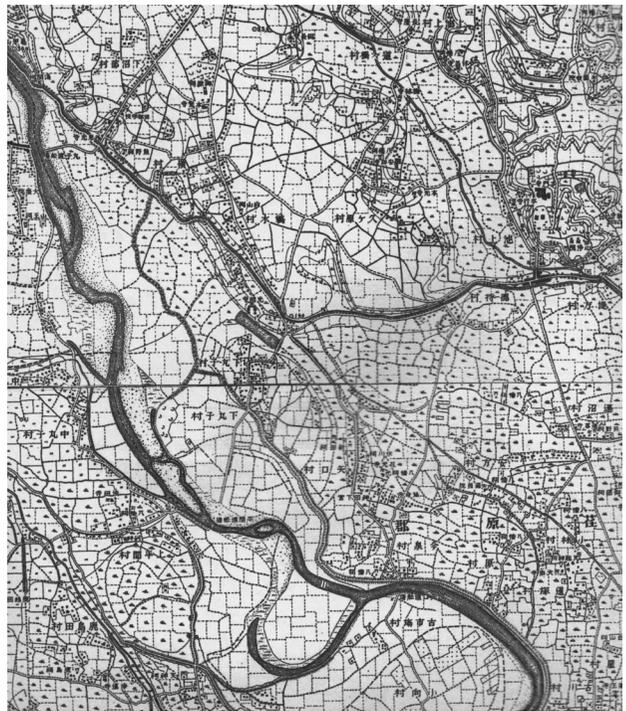
以上は東京湾側からの海域進入が想定されるものであったが、**多摩川側から大田区側への海域浸入**はあったのだろうか。迅速図「二子村」では、現大田区を流れる呑川等の中小河川の殆どが東京湾側に流出して多摩川に入るものを見いだせない⁷。その原因の一つは海拔50m近くある上沼部村・奥沢村の辺りから南東に向かう丘陵の存在で、立川から続く国分寺崖線最南端に当る。この丘陵先端近くに36.9mの亀甲山、最先端に浅間祠がある。この丘陵によって流出を阻まれる区域の川は多摩川側に流れ出すことはできない。次は亀甲山丘陵終点より先に続く六郷用水の土手で、小支谷や呑川低地から多摩川側に流出されないようになっている。六郷用水は近世初期に築かれたものなので、それ以前の1100年海進時には呑川低地や小支谷が多摩川側海域に繋がっていた可能性はある。

呑川低地が海域化し奥沢村東側や千束池辺りが海域最奥となっていた時代以後、海退が進行するにしたがって海岸線も徐々に後退していった。その海岸線の痕跡が残っていた地域においては、かつての入海であると伝承される場合もあれば多摩川の跡として語られることもあったろう。そのような痕跡の事例を地形図上から窺うことができる。池上村南にある徳持村南側の道が南側に膨らみ円弧状になっているのはここが海際であった時代があることを示すものだろう。それは池上村よりも退いた段階のことで早くも12世紀半ばで或は1300年前後だろう。13世紀後半には池上道が東海道となっているので、それ以前で遠くない時期である。その南側にもそのような線を想定できそうである。例えば女塚村・蓮沼村の南側の道は御園村の北を東から西に通じ途中上下しその後北西に延びて池上道に接続するが、その後海際となっていた時期があるだろう。

伝承は蓮沼村や古川村に見ることができる。風土記稿によると、**蓮沼村**の地には往古多摩川が流れ良方向の**不入斗村磐井神社**の傍より海に沃いでいたが、何時の頃から水路が変遷して後は沼となり蓮が多く生じるようになったので村名となったと伝承する。また小名「木舟」の地名は往古多摩川がこの辺りを流れている頃「木舟ノ渡」という渡し場があったことに因んだものと注記がある。

この地には往古水域が来ていたと判断できる痕跡がみられ、里人は多摩川の流れとして認識していたが、編者は今多摩川の流れは南方十七八町を隔てた八幡塚村の南にある事実を挙げ、これを「桑田碧海の変」の語で評した。筆者はこれこそ海域の痕跡のことで、海退が前述徳持村ラインより少し進んだ段階のことだと考える。東北の不入斗村磐井神社の傍より海に沃いでいたとあるのは、この蓮沼村から不入斗村磐井神社を結ぶ線が海岸線だった時期があることを語るものかもしれない。古川村（現大田区西六郷1丁目・新蒲田3丁目・多摩川2丁目、多摩川下流北岸）は蓮沼村の遙か南にあって間に御園・小林・道塚・町家等の村々を挟む形となっているが次の伝承がある。まず村名の由来として「古ハ當村総テ多磨川ノ流ナリシカ、イツノ頃ニカ川瀬今ノ所ニカハリタルニヨリ、其跡ヘ村落ヲナシタレハ古川ト云名ハ起レリト云傳ヘタリ」と、村域総てが多摩川流域だった時代があるとする。これは川跡を言っているのだが、銀杏の古木二株についての薬師堂縁起は入江が存在したとする話を伝える。光明皇后がお乳を祈った際行基の奏聞に従ってこの木を舟の中に植えて海上に流した所、当所薬師堂前入江に着いたという。評者が言うように「ウケカタキ説」であるが、着岸場所として「薬師堂の前なる入江」と記されている事実はかつてそこに入江が存在したとする伝承の存在を示すものである。

下丸子村東南にある矢口村（大田区矢口1～3丁目）は延文3年（1358）新田義興謀殺の矢口渡しの地とされるが、村内矢口沼はかつて入海だったとの伝承がある。『武蔵演路』荏原郡矢口村の記述では、矢口沼は昔の（多摩川の）川筋を示すものだとする伝承があることを挙げ、そのことから古には海が入り込み入江となっていたと思われるとしている。編者はその伝承を踏まえ、当時の新田神社と伝新田義興墳の位置等と関係付けて入り海の方角について現地比定を行っている。新田神社の後ろに義興のためのものとされる墳があるが、伝承ではそこまで海が来ていたというのである。その当時海の方からやってきたので、今社がある方が裏ではないかとする意見まで付け加えている。編者には1100年海進期と海退期にある義興謀殺時期の海域とを区別する認識はないが、謀殺時期に海退していたとしても多摩川水運が機能していたと考えられるので、多摩川の方から入ってくると設定できる点では共通する面もあるだろう。風土記稿では入江の文字を見いだせないが、新田社の辺りに「多磨川ノ迹」が見られること、多摩川が「昔ハ東北ノ方堤ノ下ヘヨリテナカル。其頃ハ川幅モ今ヨリハ大ニヒロカリシト云」などほぼ対応する事実を記している。矢口村内古川堤の注記に「隣村鶴ノ木光明寺池ノ邊ヨリツ、キテアリ。長



地図4 多摩川沿いの諸村落（陸地測量部、明治14年測量同18年製版同20年出版同24年再版2万分1二子村と明治14年測量同18年製版同26年再版2万分1川崎驛を合成）

二百九十間ホト。堤上ニ松杉ノナミ木アリ。」と記している点は、鶴木村の「光明寺池」から続く堤がかつてそこまで来ていたことを語る。ここでは多摩川の土手と認識されているにすぎないが、1100年海進頂点期を過ぎ海退が進行していく特定段階に海域がそこまで退いていたことを示すものだろう。この堤については鶴木村の光明寺池の記録にも対応する記事をみることができる。光明寺池は鶴木村大金山宝幢院光明寺の多摩川側にあるが(大田区鶴の木1-23、多摩堤通り沿い)、「是古への川筋にて矢口の沼二つ、き中堤あるのミ」とされている。この堤は迅速図によると池と光明寺との間を通っている。堤の始点は六郷用水が鶴木村の西で左、右と曲げられている辺りで、西北から来る六郷用水の延長の形である。池と光明寺の間ヲ抜け、下丸子村の東側を南東向きから南向きに続き、矢口村に入り南下して今泉村の南で多摩川の土手に繋がっている。この間の下丸子村東側では円弧状で川跡のような水田地帯を形成している。近世の人々からすると、この痕跡は多摩川の川跡でその堤はそれに伴うものと認識されたのも無理ないが、筆者は1100年海進頂点期を過ぎてパリア海退が進行する中で、海域が少なくともそこまで退いた段階で作られた堤防に起源を有すると考える。新田祠裏の水田が同じ幅で光明寺池の辺りまで入り込んでいて、新田社西側の入江がそこまで続いていたと理解できる。光明寺は六郷用水ラインの外側に位置し、周囲を10~15mの土手で囲まれている。かつての海域の跡と思われる池はその外側に残っている。そこまでが海域だった時期は1100年海進頂点期よりかなり後のことではないか。海退過程においては海際の陸地化が進むに従って少しずつ再開発が進み、その都度海岸線に堤が築かれ陸域を不時の海潮再浸入から護る手立てとされていたことについては、既に円覚寺領尾張国富田荘絵図に見られる重層的に形成された輪中等から海水面変動の跡を解明する作業において明らかにしている⁸。

品川区から目黒区への海域進入が想定される立会川低地と目黒川低地については最奥海域を明示する伝承を見いだせない。呑川低地や、池上道から明らかにした所を基準にして地形等から想定できる所を述べる。立会川は現在「目黒区碑文谷公園の弁天池(と清水池)を水源とし、品川区中延・西大井を経て勝島運河に注ぎ、東京湾に至る⁹」。迅速図によって大井村から東京湾に流出する地点から上流に遡る¹⁰。海岸線近くの水田や湿地の中を西北西に進んだ正面に池上道が通る小台地に突き当たるので、低地は北に向かい標高5~10mを進み台地に沿って左折し湾曲しながら西に向かう。上蛇窪村辺りで川周辺の水田地帯は10~15mとなっており、上蛇窪村西方で中延村東南辺りの地点で品川用水と重なる。地図では品川用水の下流に位置付けられているように見え、碑文谷村方面への川筋を追うことは出来ない。水田地帯として追ってみると碑文谷村まで辿ることはでき碑文谷弁天池南部の低湿地にもつながる。河口近くの大井村の水田や湿地辺りは海拔5m以下で海域化していたのは確実だろう。その後小台地の東側の裾を北上するあたりまでは、ほぼ同じ標高で海域化を想定でき



地図5 立会川低地(陸地測量部、明治14年測量同18年製版同20年出版同24年再版2万分1二子村と明治14年測量同18年製版同20年出版同24年修製再版2万分1品川驛を合成)

る。水源に近い荏原郡碑衾町大字碑文谷に小字「鷹番」「唐ヶ崎」（現行中央町1～2丁目）があった¹¹。今も目黒区中央町1丁目17番のバス停に「唐ヶ崎」があり、13番に「唐ヶ崎館」がある。鷹番1丁目と2丁目の間を「唐ヶ崎通り」が貫いていて、目黒通りと駒沢通りを繋いでいる。かつて清水池から弁天池へと繋がる大池があって、そこに突き出した岬のような形を呈していたのかもしれない。1100年海進頂点期にそこまで海域が及び「唐ヶ崎」は岬だった可能性はある。



地図6 目黒川低地（陸地測量部、明治14年測量二子村・明治14年測量品川驛・明治13年測量同19年製版同20年8月26日出版同24年修製再版同年6月27日更改出版2万分1内藤新宿・明治13年測量同19年製版同23年再版同30年修製2万分1麴町區を合成）

目黒川は現在「世田谷区上北沢付近を水源とする北沢川と、同区烏山を水源とする烏山川、さらに駒場付近からの小川を合わせ、同区池尻で合流し以下目黒川となり、大橋を経て東横線中目黒駅付近で、世田谷区弦巻付近を水源とする蛇崩川を合流、目黒橋以後は山手通りと並行して流れ、港区芝浦運河に注ぐ¹²。河口近くでは東の海に向かっているが、獵師町・利田新地の町並みに遮られ、その町並みに沿って北西に進んだ後に砂洲を東に切って第四砲台前の海に流出する。上流に向かってみていく。北品川宿と南品川宿の間を流れる川が目黒川（品川）で西に進み東海鉄道下を横切り、後北西に遡ることになる。北品川宿側の台地（御殿山）と居木橋村の台地との間の海拔5m以下の水田地帯を西北西に遡る。『武蔵演路』に「往古御殿山より今の品川宿迄ハ一円に洲にて有し。今の道筋より上の方を往来せしと云」とあるのは、御殿山の下が「洲」だった頃のことを言っているが、1100年海進期には海域そのものだったろう¹³。谷山村と桐ヶ谷村の間を抜ける辺りの水田地帯も5m以下で、上大崎村と下目黒村との間の低地も同程度である。中目黒村と三田村の間を北西に遡る辺りの低地は5～10mの水田地帯である。10m線を超えるのは中目黒村北方で現在の駒沢通りを過ぎる地点（正覚寺の北、さいかち橋）である。渋谷広尾町台地の南西辺りで10m以上、上目黒村の西で15m線を超え、さらに20m、25mを超えて池尻村北で北沢川と烏山川の二つに分かれる。15m線より低い所でみると、居木橋村について「ソノ土ハ砂マシリテ瘠地ナリ」とあるのは¹⁴、海岸の砂に由来するものと考えうる余地はある。また桐ヶ谷村について「北ニ及ヒテハ地低クシテ谷合多シ」と低地であることを示しており、かつて海域が及んだと考える余地はある。次に風土記稿所載三田村の小名「千代ヶ崎」と「鎗ヶ崎」が目目される。千代ヶ崎については「目黒川東岸台地にあり、松平主殿頭の下屋敷のあたり」で「現在の目黒区三田2丁目のうち、目黒三田パークマンションのあたりか」とされる¹⁵。台地のようだが、南の方に突き出ている場所で眼下に目黒川が流れる。目黒川の岸は10m以下で、この辺りが海域化した可能性は高い。往時岬のように海に突き出していた勝地だったのかもしれない。三田村と中目黒村の間の水田地帯が海域だった可能性はある。鎗ヶ崎は道路地図によると旧山手通が駒沢通に突き当たる三叉路地点にその名が残っている（代官山駅南南西200m）。明治初年そこは海拔30m程度の台地の端近くで少し西側に

突き出した形になっている。

1100年海進期には入江を見下ろす景勝地だったろう。海拔10mラインを超えるのは鎗ヶ崎下より少し下流で、中目黒村北方で渋谷広尾町の南西辺りとなる。鎗ヶ崎の下辺りで蛇崩川が合流する。上流の上目黒村で駒場方面からの小川が北から流入しており、その西方で15mラインを超える。上目黒村の川の南西側台地に**東山貝塚遺跡**がある。目黒区東山2～3丁目一帯に広がっており明治中頃に坪井正五郎によって発掘されたもので「縄文後晩期を主体とする集落跡であるが、近年の発掘調査により縄文時代中期や弥生時代後期の集落跡も発見」されている。「ハマグリ・アサリ・ツメタガイ・ヤマトシジミなどの貝殻や、クロダイ・アジ・フグ・コイなどの魚の骨、イノシシ・シカなど動物の骨も」発見されている¹⁶。この地は、大山街道が宮益坂一道玄坂方面から台地を抜けて低地に下った所で目黒川を横切る場所の下流側が15m線である。「上目黒村」とある水田地帯まで15m以下であるが、この低地まで1100年海進期に海域が及んでいた可能性は高い。縄文晩期この辺りまで海域だったとすると、1100年海進期でも十分ありうるからである。また明治初年川の両側の海拔はこの辺りで15mラインを超えることになるが、現在川の両側の高さや川底とはかなりの幅があって、1100年期以後の沖積作用や人為的埋め立てが15m近く及んだ可能性がある。問題はさらにその上流で、大山街道を超えて西進し、すぐ20m線、25m線を超えて北沢川と烏山川に分岐する。分岐点は25m線を超えていてかつて海域が及んでいたようには見えないが、この間の土地の嵩上げは予想外に大きかった可能性がある。池尻村の存在は最奥海域の名残として池が存在していた可能性を残す。少なくとも大山街道手前まで海域が及んだ可能性が高く、その先も感潮河川ならばありうる。

3、豊島郡域における海域浸入状態

風土記稿豊島郡上渋谷村の項には、**上渋谷村**の辺りは「上古」「**江海二濱シ**」ており「**鹽谷ノ里**」と号していたこと、今でもその辺を穿つと「土中若干尺ノ下」は「**皆昔時海底ノ土砂**」が出てくること、これに関して「**桑滄ノ變**」の証拠だとする説があること等が述べられている。また源義朝の近習金丸の旧跡であるとされる。ここに云う上古とは1100年海進期のことだろう。義朝生年1123年は1100年海進期に属し、彼に掛けて海域化が記憶されていたのは偶然ではない。上渋谷村の辺りは現在の渋谷区渋谷駅周辺に当り今でも周囲に比し低地を成していることが知られる。この地に海域が及んでいたとすると、渋谷川（古川、赤羽根川とも言う）低地に沿って入り込んでいたと考えられる。今日渋谷川の家への出口は金杉川口一つだけで迅速図「**麴町区**」でも同様だが、風土記稿所載の正保・元禄両豊島郡図では「**飯倉町**」南方で二つに分かれ、一つは金杉町と柴町との間（正保図による。元禄図では増上寺地区と芝金杉町との間となっている）を通り江戸湾に、一つは柴町と荏原郡との間（正保図による。元禄図では芝町と荏原郡の間となっている）から江戸湾に流入している。南の川は明治期の図でも全く見当たらないが、僅かに痕跡を辿ることはできる。川に分岐点と思しき辺りを探すと、渋谷川の左岸に竹谷町があるが、その対岸となる右岸の池のある区域が目される。その辺りは10m等高線より低く湿地のようで、分岐した川跡だろう。その東側に池があり、その東側にも松方邸の南側の池、春日社と痕跡を辿れるが、その東側には三田育種場・競馬場やそれを囲む敷地があって辿れなくなる。さらに東に行くと三田育種場・競馬場東側に



地図7 渋谷川低地 (7-1 明治13年測量同19年製版同20年8月26日出版同24年修製再版同年6月27日更改出版2万分1内藤新宿 陸地測量部、7-2 明治13年測量同19年製版同23年再版同30年修製2万分1麹町區)

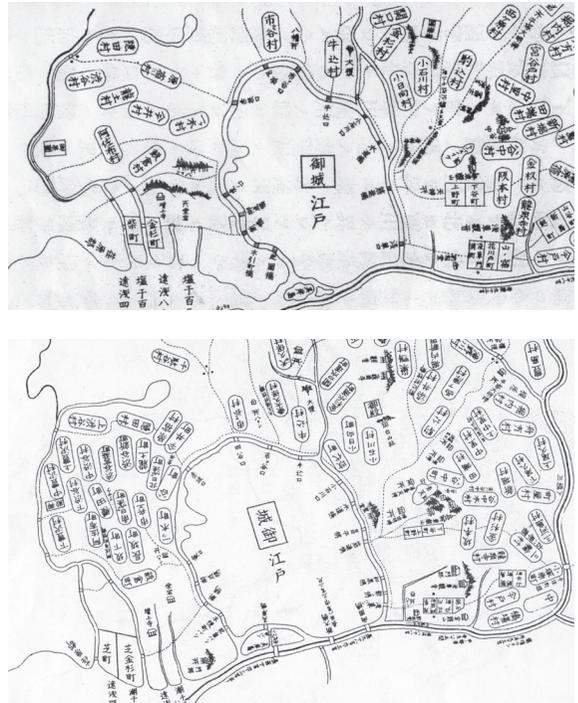
海から入り込んだ水路があってその南側にも水路跡がある。それらは南の川の痕跡に関わるもので、元禄期以後の埋立て・嵩上げが甚だしく大きな変化があったのだろう。1100年海進期にはこの辺り帯は基本的に海で部分的に島や洲が分布するという状態だったと考えられる。この辺りから入込んだ海域は渋谷川沿いに西に向かい、渋谷廣尾町辺りで北に折れ北北西に向かい現在の渋谷駅周辺に至ったと考えられる。その先が問題である。現在暗渠になっている渋谷川は、宮益町辺りから向きを北北東に変え隠田村→原宿村、千駄ヶ谷村の東を北上し植物御苑の池に繋がっている。現在の経路は途中まで現明治通りに沿っているが、明治通りは原宿署東側(原宿駅東北)で左に折れて北北西に向きを変えるのに対し、渋谷川はそのまま北北東に進み仙寿院交差点辺りから外苑西通りに沿って北進し新宿御苑の池下まで行く。問題は、海進頂点期に海域が渋谷川低地のどの辺りにまで及んでいたのか、特に最奥が現新宿御苑の池の場所まで及んでいたか否かにある。迅速図によると¹⁷川周囲の標高が原宿村北部の仙寿寺南で20mを超え、植物御苑池周囲が20～25mとなっているのは海域が及ぶのは無理の様に見える。しかし、前述のようにこの間の沖積作用と人為的埋立てによる低地の嵩上げは顕著で、近世後期～明治初年には谷と認識されない平地でもかつては深い谷であったという場合もある。その点で注目されるのは風土記稿所載の正保と元禄両豊島郡図である。両図ともに渋谷川は現在の新宿御苑と思しき辺りで大きな袋状の池に繋がり、出口も一定の幅(川の中流より太い)で表現されている。高い所にある池から低い所に流下しているというようなものではなく、川がそのままの水位で奥の水源池に繋がっているようである。大雑把だが水源池は大きく描かれ、特に元禄図では上野不忍池に劣らない大きさである。迅速図では、この池は植物御苑の一つの池として描かれているが、現在は四つの小さな池(上ノ池・中ノ池・下ノ池、玉藻池)に分かれている。明治初年以後も改変されたことを示しているが、以前はもっと広がったものを近世に内藤氏の所領として相当の埋立て・嵩上げされてきたことを推測させる。1100年海進期の入江最奥が池として残される場合が多いことを考えると、海進頂点期にそこまで海域が及んでいた可能性はある。その他、風土記稿今里村の小名「沖島」が注目される。今里村(今は港区白金・白金台)は近世荏原郡の方に属し明治13年迅速図もそれによっている。村内沖嶋の注記に「村ノ東ニ

アリ」とか蜀江臺の注記に「村ノ東北沖嶋ノツ、キナリ」とか記され、1100年海進期に村の東北に渋谷川低地からの海域が入り込んでいた可能性がある。渋谷川低地の南西側に台地が延びているが、それを越えた谷間には目黒川が流れている。渋谷川と目黒川とに挟まれた台地は1100年海進期には二つの入江に挟まれた細長い岬となっていて、先端で広がる形を呈していたものと考えられる。

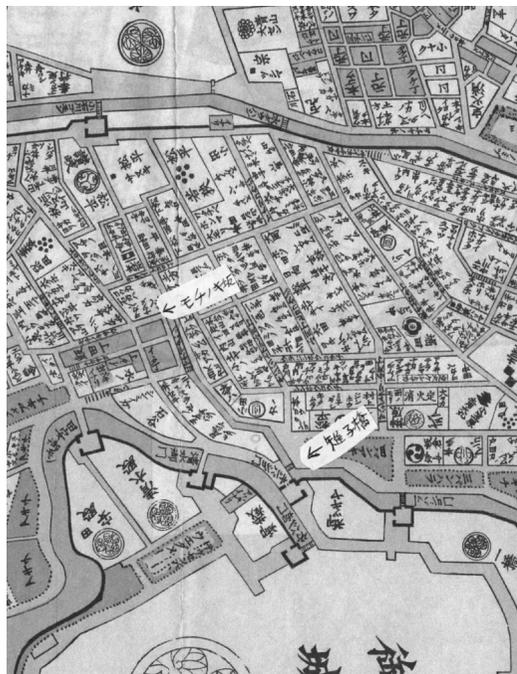
江戸城周辺低地考察に当って、天正18年(1590)8月徳川家康江戸入り前の状態を押えておく。その頃江戸城の東から南にかけて殆どが「葦の生えた潮の浜」状態だったとされているのは¹⁸、1500年代末期が1100年海進期に次ぐ海進期であったことに符合する。また江戸城の周囲南側から東側に繋がる区域は、家康入部後の台地開墾と海・低地の埋立て石垣構築等々の大工事により自然地形は大幅に改造された。特に

神田山から駿河台のかけでの開墾工事以前は台地西側の江戸川や小石川の東への進路は台地によって遮られていたため、飯田橋と水道橋の間辺りから南に向かい、南方日比谷入江や南東日本橋方向で海域に通じていた。また東側から南側にかけての区域は、日比谷入江埋め立てに代表されるように海域埋め立てによって造成されたものであった。したがって、1100年海進期には基本的に神田川は東進せず神田山台地が南に張り出して東からの海域浸入を阻む岬となっており、海域は江戸城東や南側から入り込む地形だった。江戸城構築工事前の状態については、『武蔵志』「豊島郡」所引酒井忠明『南向茶話』の記事が参考になる¹⁹。「今ノ雉子橋ノ外ヨリ北ノ方□(大カ)沼ニテ」、「西ノ方竊木坂下迄入江ニテ有シヨシ」とある。雉子橋より北は大沼で、入江は竊木坂下まで入り込んでいたという。雉子橋は「外堀(日本橋川)に架かっていた旧郭門橋。千代田区一ツ橋1丁目・九段南1丁目と一ツ橋2町目を結ぶ」。竊木坂は冬青木坂とも記し万年坂ともいい「千代田区九段北1丁目と富士見1丁目の境をなす坂」である(角川日本地名大辞典13東京都)。共に神田川より南側で江戸城内堀近くにある。竊木坂の下まで入江がきていたということは内堀辺りにも海域が入り込んでいたことを示している。雉子橋の北方とは、千代田区神田神保町・神田猿樂町・西神田・神田三崎町・飯田橋、神田川、東京ドーム・小石川後樂園がある文京区後楽・春日・水道などを含みこむ地域で、大沼が広がっていたのである(小石川沼)。享和2年(1802)以前成立の『武蔵志』に「日本橋 常磐橋 呉服橋ノ間ノ御堀ノ先ノ町中ノ堀ニ掛ル 此橋ノ下 潮汐出入ス」とあり、16世紀末より海退していた18世紀末頃にあっても日本橋下を潮汐が入り込んでいたようだ²⁰。

風土記稿豊島郡貝塚領一ツ木町の記事には南側外堀低地が入江だった時代のあることが記されている。それは、豊島郡の總説「合領七」「貝塚」記載と個別町村としての「一木町在方分」の由来



地図8 『新編武蔵風土記稿』所載豊島郡図(上、8-1 正保年中図、下、8-2 元禄年中改定図)



地図9 江戸城北部、雉子橋・モチノキ坂付近（高井蘭山、天保14年再板江戸城図、人文社発行）



地図10 皇居付近（陸地測量部、明治13年測量同19年製版同23年再版同30年修製2万分1麴町區と明治13年測量同19年製版同20年8月26日出版同24年修製再版同年6月27日更改出版2万分1下谷區を合成）

記載との二箇所に見える。前者に「往古此地及ヒ麴町ノ邊マテ海濱ニシテ」とあり、後者に「鯨河橋町ノ傳ニ、上古ハ此地江海ニ濱シテ、豊島ノ入江ト號セリ」とある記述によって、往古（上古ともある）この一木町や麴町辺りまで海が入り込んでいて豊島の入江と称されたとの伝承である。伝承における「往古」とか「上古」とかの表現は家康入部期より遙か昔を指す言葉であって、1100年海進期のものと見てよいと思う。今“一ツ木通り”（港区赤坂3丁目と4・5丁目の間）の名が残っているが、当時の一ツ木町の範囲はもっと広く溜池縁まで含んでいたと考えられる。風土記稿所載豊島郡図の一ツ木村をみると、元禄図では谷町と隣接して一ツ木村が描かれているが、正保図では村数は少なく一ツ木村だけが外堀の南外側に面しており、赤坂口からほぼ溜池の端近くまで含んでいる。外堀に接している低地から台地の方までかなり広い範囲を村域としていたことを窺がわせる。豊島の入江は、少なくとも一ツ木村が接していた溜池・外堀辺りから紀尾井町付近まで入り込んでいたと思われる。江戸城構築時に埋め立てられた日比谷入江よりも奥である。四谷、赤坂離宮の池、外堀通り、弁慶堀、溜池、汐留等の辺りから中央区の浜離宮恩賜庭園への一帯は海域だったろう。また總説に「貝多キ地ナレハ開墾ノ砌貝殻數多取テ山ノ如ニナシ、塚ヲ築キシヨリ、此名起レリト。今モ麴町武家地ノ内ニ彼古蹟アリト云」とある。貝殻が多く埋まっている場所で、開墾の際貝殻を堀出し山と積んで貝塚を成すようになっていたと記されている。この「貝塚」の存在に関わってくると思われるのが、合領「貝塚領」の存在である。「貝塚領」の呼称については、『風土記稿』編纂調査が行われた文化・文政期にはこの「一木町在方分」一箇所しか残っていなかったが、かつては「貝塚領」の名称によって多くの村がまとめられ「合領」（組合い）とされていた時代があったと思

われる。それは後述の「貝殻山」「貝塚」「牡蠣殻山」が多くの村々に存在し、享保年間までその牡蠣殻を浅草の工場に運び胡粉製作が行われていた事実に関連する。それへの課税のため対象町村が「貝塚領」として一括されていたのだろう。

江戸城北側の外堀周辺低地には「小石川入江」の伝承がある。現在皇居北側を東流する神田川は外側の外堀をなしほぼ千代田区と文京区の境を成しているが、かつてその辺りに低地が広がっていた。『新宿区史』では家康入部前の状態として「小石川池」の存在を想定している²¹、『長祿江戸図』では湖の様にも見える袋状に広がった「神田川」が描かれている。家康入部以前、この地に小石川池（大沼とも呼ばれる）が広がっていたとする見方は共通認識となっているが、1100年海進期には入江となっていたと考えられる。それを裏付けるものとして文京区「小日方」「小石川」台地下まで入江が入り込んでいたという伝承がある。文京区春日1丁目、小石川後楽園近くの北野神社は「牛天神」として知られるが、その由来を記した宝暦2年（1752）2月「江戸小石川惣社牛天神略縁起」に次がある²²。寿永元年三月に頼朝が東国の敵を追伐した帰途、「小石川の江湖」に船を止め老松に繋いで難風を凌いで風を待っていた。そこで夢を見て、自在天神から二つの吉事を約束された。その後長子頼家誕生と平氏討滅を実現したのを喜び、当社を建立することになったとの話である。これを歴史事実とはみなすのは無理で、神社建立を頼朝に託けたものというべきであろうが、注目されるのは、その頃この地が「小石川の入江」に面していたとあることで、何らかの形で入江伝承が残されていたことに基づいたものだろう。このことに関して「今におゐて船つなき松のあと・蛸殻坂・網干坂などの古跡此ほとりに有。これ古へ江湖なるによつて松によそへて山を泉松といひ、江になそらへて寺を龍門と呼へり」とあって、宝暦当時においても船繋松の跡、牡蠣殻坂、網干し坂等の古跡が確認できたと思われる。その後のこととして「中昔暦應の頃入江つきて秣場となりしか、土民此地に牛を放て草をはましむとかや」とあるのは、その後の海水面低下によってこの地が海域でも湿原でもない状態となっていく、さらに暦応頃には草原化して秣場（＝放牧地）として利用されるようになったことを伝えている。

近世には幾つかの場所に存在する「舟繋松」伝承地の評価について論争があったが、『武蔵濱路』編者は馬を繋ぐ松であるという説を退けて、実際にすぐその下まで川が来ており川舟の船頭がその松に舟を繋ぐことがなされていたと主張している。地名を挙げているのは新堀村青雲寺境内、小石川白山、水戸侯館舎の三カ所だが、もっとあったようである。特に後二者の舟繋松に関連して、「皆小日方小石川入江にて舟の往来せし時の事也」とあって、かつて小石川や小日方の台地下辺りまで入江が入り込んでいた時のことだとしているのである。「小石川白山」と「水戸侯館舎」の地とは、ともにかつて存在していた小石川入江に面した場所だったと考えられ、前者は牛天神縁起が述べる舟繋松と同じものを言っている可能性がある。入江の規模は迅速図の10m等高線に囲まれた地域で、今東京ドームや小石川後楽園を中心とする範囲にほぼ入っていたであろう²³。小石川入江に繋がる海域は日比谷入江や日本橋川筋から入り込んでいたことになる。鎌倉中期、両海域の間に当たる場所には江戸郷前島村（東京駅中心の辺り）が存在していたが、1100年海進期には殆ど海域化していただろう。国土地理院1万分1地形図「日本橋」昭和58年によると、標高は、水道橋駅西北西地点の外堀通りが4メートル、同北側外堀通りが5mである。平川のあった辺りの如水会館近くの道路が3.1m、日本橋消防署東北の道路1.8mなどである。

江戸城の東北、開鑿以前の神田山の東側に関しては、まず家康関東入部頃の状態についての幕府関係者の伝承が注目される。風土記稿豊島郡下谷分では「事蹟考」が記す所として「大猷院殿御代

ノ後マテ浅草寺雷神門ノ邊ヨリ東叡山ノ岸マテ葦一面ニ茂リシ谷ニテ、一目ニ見渡サレシトアリ」と述べている。「大猷院殿御代」とは徳川家光将軍時代（1623～51）のこと、東叡山ノ岸というのは今の上野の山のことである。家康入部の頃は浅草の海に繋がる低湿地に葦が一面に生い茂り、それは雷神門の辺りから上野山の下まで続いていたが、その状態は 17 世紀後半頃まで続いていたという。上野台東側の「下谷・浅草の低地」については、「駒形付近が最も高く 4m、浅草寺本堂の位置は 3m、蔵前から鷲神社（千束 3 丁目）までが 2m でゆるやかな微高地となっており「海成の沖積低地」であるとされている²⁴。海成沖積が進行した時代について、従来は縄文海進期と認識されるだけであったが、筆者は 1100 年海進期も加えねばならないとしているのである。また江戸期以前の台東区は「大半が低地・沼沢地であり、上野台上の谷中、縁地部の金杉・三の輪、隅田川沿いの鳥越・浅草・石浜周辺に村落が点在するにすぎなかった」と指摘されている²⁵。これは今日に近い位に上昇していた海進期である 16 世紀末期のあり方である。それ以前今より 2m 程低下した 1450 年頃はかなり高燥化していたと考えられるし、逆に 1100 年海進期には大半が海域化していたとみることができる。縄文海進期に不忍池北方まで東京湾が入り込んだことが指摘されてきたが、1100 年海進期も少なくとも不忍池辺りまでは海域化していたと推測できる。

武蔵野台地東縁は、所々切れ目があるが赤羽駅西側の赤羽台に始まり京浜東北線に沿って東南に向い飛鳥山を経て上野の山まで続く（北・荒川・台東の三区）。『武蔵演路』豊島郡新堀村条に記す新堀村青雲寺境内の舟繫松は隅田川側からの海域に面していた可能性を示す。青雲寺は現在でも西日暮里駅西側、西日暮里公園南隣、荒川区西日暮里 3 丁目に存在していて、舟繫松の位置も想定可能である。明治 13 年迅速図に記載はないが、日暮里村で台地が切れている中を東西の道（道灌山通り）が通っているその南東側台地の縁で諏訪祠の北の谷側にあり道灌山に隣接する。風土記稿豊島郡新堀村・青雲寺の条でも取り上げ、船繫松が「境内東北ノ崖ニ」あり「古木ハ枯テ植續シモノトミュ」と述べた上で、「往昔コノ崖下マテ入海ナリシ時船ヲ繫キシユヘ、カク名付ト云傳フ」との伝承を記し、「モトヨリ慥ナル據ナシ」としている。風土記稿では明白に青雲寺境内の崖下まで入海であったとする伝承を伝えている。「樹下ニ船繫松ノ碑ヲ建テ銘文ヲ刻ス」とある。この伝承は樹下にある「船繫松ノ碑」とともに人々に認知されていたようである。船繫松の場所については、武蔵演路には「浅間松崖岸ニあり、船繫松同所」²⁶とあって浅間松とともに「崖岸」に存在したことが知られる。風土記稿では境内の東北の崖にあるとされているので、その位置は北に傾斜した台地の縁の東北側崖岸にあって東側に広がる低地に面していたと判明する。迅速図では諏訪祠と東西道路の間で鉄道側によった辺りということになる。図では中山道鉄道工事関係で造成された部分に重なるが、鉄道造成以前は眼前に水田地帯が広がるだけだったであろう。

もう一つの手がかりとして、近世地誌に見られる貝塚とか蛸殻山等の存在がある。武蔵演路・豊島郡では三河島村に「蛸殻山」、風土記稿・豊島郡では金杉村の小名に「貝塚」、谷中本村の小名に「貝塚」、西ヶ原村の小名に「貝塚」、田端村の小名に「カキカラ」の、『武州豊島郡平塚郷上中里村平塚大明神の社并別當城官寺縁起』では王子村・平塚村に「牡蛸殻山」の、記録を見いだせる。このことから、少なくとも「牡蛸殻山」²⁷が三河島村・田端村・王子村・平塚村に、「貝塚」が金杉村・谷中本村・西ヶ原村に存在したことが推定できる。まず確認しておくべきなのは、近世地誌に見られる「貝塚」には、近代歴史学概念が定義する貝塚とは違う自然堆積した貝殻礁特に牡蛸殻礁の場合があることである。近代歴史学上「貝塚」は、人間が採取した貝の身を食用に取りだし殻を捨てた場所を指し、貝殻だけでなく魚骨・獣骨や土器その他が捨てられておりさらに人骨・犬骨などの



地図11 中山道鉄道沿線（現北・荒川・台東3区の辺り）（明治13年測量同19年製版同20年8月26日出版同24年修製再版同年6月27日更改出版2万分1下谷區）

埋葬も見られる場合もあるとされる。これは陸地において人為的・社会的・文化的に形成されたものと言えるが、近世地誌等に見られる「貝塚」の場合（地名だけのこともある）それとは区別される自然堆積したものも含んでいるようである。それは特に潮間帯に繁殖した牡蠣殻群によって牡蠣礁が形成されたもので、蛤等他の貝殻も含まれることもある。

武蔵濱路・豊島郡・三河島村の牡蠣殻山の記述から実態を見ておこう。「往古は十余町程、高き山ニして皆牡蠣殻也。誠ニ雪の降るがごとし。はるか遠目ニも真白ニミヘシ也。享保初迄ハ、此牡蠣殻を掘て馬に負せ、浅草の胡粉を製す所へ日々運び胡粉させしより、今ハ大方其跡畑と成、わつか五六町か程牡蠣残れり。今も胡粉とするかしらす。すへて此の辺り尾久町谷村わたりの畑深く掘れハ、牡蠣殻多く出る也」。「十余町程高き山ニして」という表現からその牡蠣殻山の高さが十余町（千数百m）あったというようにも受け取れるが、それはありえない。「十余町程」というのはその山の連なりの長さを大雑把に述べたもので、牡蠣殻が高く積もり山をなして遠目にも雪のように白く連なっていたということだろう。享保初め頃までその牡蠣殻を掘って浅草の胡粉製作所にまで運んでいたが、今は採りつくしその景色は見えなくなった。跡地は畑になっているので深く掘れば牡蠣殻がでてくるとのことである。この辺りから「尾久町谷村あたり」にかけてのことだという。著者大橋方長序は安永9年（1780）となっているので²⁸、18世紀後期の実態を踏まえたものだろう。風土記稿豊島郡三河島村条には牡蠣殻山の記述は見えないが、金杉村と谷中本村の小名「貝塚」の説明で、両「貝塚」ともに「牡蠣殻」或は「貝殻」が積もって丘陵の如きであったと記されているので、武蔵濱路・三河島村の記事で云う牡蠣殻山と同種のものであることがわかる。西ヶ原村の貝塚の場合は現在西ヶ原貝塚として近代歴史学上の定義に従えるものが台地上に存在する。

この牡蠣殻山は基本的に1100年海進期生成ものと考え。縄文時代生成ではない理由は次にある。まず、牡蠣殻山から牡蠣殻を採取しそのまま浅草の胡粉製作所に運んだという事実は、ほぼ牡蠣殻だけの牡蠣殻礁だったことを示す。もし歴史学上定義される縄文貝塚であるのなら、何千年も地中に堆積していたため土にまみれ他の遺物も交っていて、胡粉原料として使うには選別泥落とし等の作業が必要となって適さないからである。また縄文時代堆積の牡蠣殻礁の場合でも、数千年間に土が堆積してしまい白く輝く山の列に見えるという事はありえなかつただろう。この場合の牡蠣殻山は遠目にも白く輝いていたとあって1100年海進期に形成された可能性は高くなる。かつての潮間帯に堆積した牡蠣殻礁が山の様に積上がったもので、陸に沿った海側に列をなして形成されていたと考えられる。この牡蠣殻山の形成場所を追うことによってかつての海岸線を想定できる。

ここで想定した牡蠣の異常繁殖による海岸線における牡蠣殻の堆積は今でも見られ、問題化している。①京都府宮津市（旧丹後国）宮津湾西岸にある砂洲＝天橋立によって遮られた奥にある阿蘇海では、近年牡蠣殻の堆積により「カキ島」が形成されその処理に苦慮しているとのこと。「カキ島」については、表出している部分だけでも約1千トン堆積していると推定されており、年々新たに堆積して」いるとのこと²⁹。②千葉県市川市妙典地区の江戸川放水路は人口の放水路であるが、「平常時は可動堰のゲートがしまっているため河川水と海水が分断され、潮汐の作用によって可動堰直下流まで海水が流入する海の入江同様の環境を形成」しているという。「江戸川放水路の河川敷には相当量のカキ殻が堆積しているが、採取行為に伴って放置されたものだけでなく、従前から生息していた個体の死骸も積層していた。干満による上げ潮、引き潮その他波の影響により打ち上げられたカキ殻と人為的に放置されたものを区別することは困難で、放置されたカキ殻のみを選別して撤去することは不可能な状況にあった」³⁰。二事例共に、写真によると、海岸線に沿う形で带状に

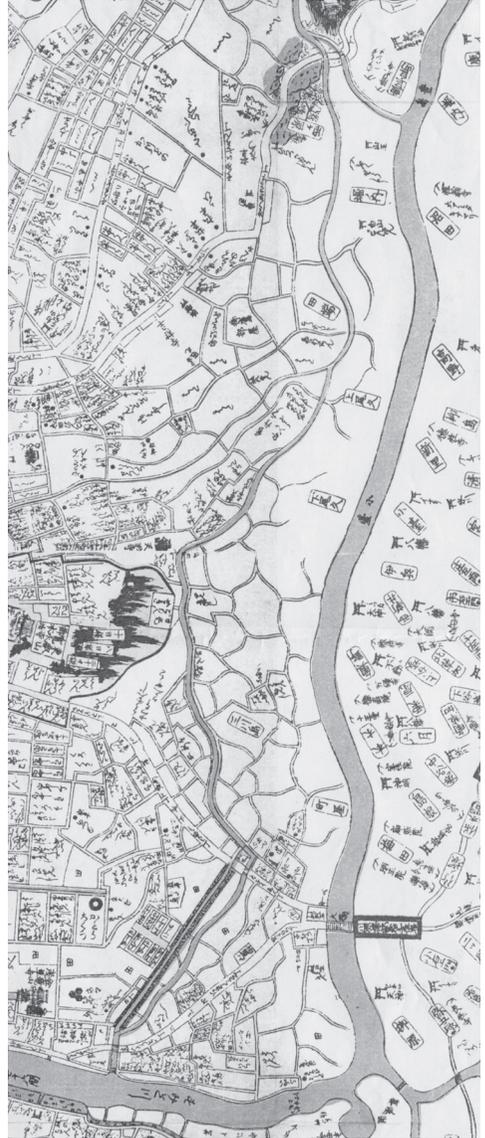
堆積し長く続いている。後者は僅かに人為的放置要因も含むようだが、両事例ともに基本は潮間帯における自然堆積といえる。この場合、両事例共に牡蠣殻を回収しようとしているので、これ以上山盛り状態になっていくわけではないと思われるが、自然のままに放置されていた場合海岸線に堆積し丘陵ようになっていくこともありうるだろう。海進・海退が繰り返される中で海岸線が移動し各段階に応じて間潮帯も前後することになり、各段階の牡蠣殻礁の列が形成され海進最盛期と前後期を合わせて巨大な山の列が海岸線に沿って出来上がっていくこともありうると思われる。

これに関して近世の識者の見解が注目される。武蔵地域は前九年・後三年両合戦の兵士を募った地域であったことによるのか、源頼義や義家兄弟に関係付けられた伝承が多々みられる。『武州豊島郡平塚郷上中里村平塚大明神の社并別當城官寺縁起』³¹によると、頼義・義家父子が京都に帰る途次この地の豊島某の館に立ち寄り「義家・義繼御兄弟は御逗留」したという。その記事への割注から次の 2 点が注目される。第一、昔は王子と平塚の里は東海道が通り船着き場があり、今でも川の流れの跡が残っていること。第二、牡蠣殻山はその流れの跡に沿って存在していて、その時代の水岸に沿ったものであろう。「元禄五年壬申夏五月」に「現住城官法印眞惠謹記」とあるのでこの縁起に云う「今」とは元禄五年 (1692) の頃となる。まだ現地に牡蠣殻山が残存していて、それに関して義家らに関連付けられたこのような認識が存在していたことになる。これは陸地に残っている川の流れの跡が八幡太郎義家時代におけるものであり、その水岸と考えられている線に沿って存在している牡蠣殻山もその頃形成されたことを述べたものである。川と表現されているが、それは当時の隅田川との関係で認識していたためで、海域に生息する牡蠣の殻が問題になっている様に実態は海と認識されていた。後三年合戦終了の 1087 年は海進最盛期に含まれ、義家時代は 1100 年海進期と重なる。注記は牡蠣殻山が義家時代の海岸線を示すものと認識していたのである。では縄文時代形成の牡蠣殻礁はありえるのだろうか。紀元前 1 万 2 千数百年前から前 1000 年過ぎまで続いた縄文時代には 100m 以上海面低下していた時期から 5～6m 上昇していた縄文海進最盛期まで含む。陸地と海域の境が前後移動するごとに潮間帯も移動し、各時期の潮間帯となっていた場所に自然形成された貝殻礁があちこちに重層的にみられ、中には海岸沿いに長く連なって続く場合もあった。この武蔵野台地東縁・隅田川間低地の地下中には縄文時代だけでなくその後も含めて海岸線が前後移動する中で形成された無数の牡蠣殻礁群が存在しており、陸地化の核となっていたと考えられる。地誌が記す畑を掘るとでてくる貝殻礁や現在発掘されている牡蠣殻礁はそのほんの一部だろう。ただそれは縄文海進最盛期のものではない。海水面が 5～6m 上昇していた最盛期潮間帯は台地の裾の一定の高さにあった。牡蠣殻礁が形成されていたとしても長い間に土砂崩壊などによって多くは失われたであろう。1100 年海進期牡蠣殻礁は縄文期牡蠣殻礁群の上に形成されたと考えられる。それは胡粉原料として使い果たされたが、縄文時代のもは採取されずに地下に残されているのだろう。

4、むすびに

台東・荒川・北 3 区における 1100 年海進期に海域化した範囲を、明治 13 年測量迅速図を媒介³²として示す。まず享保期まで胡粉製作原料を供給していた牡蠣殻山は 1100 年海進時の海岸線を示すと考えられるのでその位置を探る。平塚大明神縁起の註で云う所の「王子・平塚の里々」前面の

海岸に連なっていた牡蠣殻山の位置については、東京都北区の「中里貝塚」のある辺りが問題となる。注目されるのは王子駅と田端駅間で北本線尾久駅に挟まれた区域で、北区上中里 2 丁目と鉄道側（京浜東北線・東北上越新幹線）との間を通る道の隅田川側は傾斜していて、低い側に中里貝塚や今発掘中（2021 年 10 月 15 日現地を歩く）で牡蠣殻礁が多数出土している現場もある。この道に沿って隅田川側に海岸線が通っていたと考えられ、1100 年海進期に形成された牡蠣殻山はこの道の隅田川側に丘陵のように連なっていたと考えられる。迅速図に見られる「中山道鉄道」やそれに沿った道は、かつての海岸線に並行に陸地側を通過していたのであろう。その道と鉄道との位置関係は、飛鳥山より北方王子村以北では鉄道の方が海側にあり、飛鳥山より南方では逆に道の方が海よりになっている。中山道鉄道に沿った海岸線は、北から王子村・堀内村・上中里村・中里村・田端村・日暮里村へと続いていた。田端村については、風土記稿に小名「カキカラ」「根通り」がある。前者は牡蠣殻山のことでかつて潮間帯だった場所、後者は陸地を維持していたから付いた名称だと考えられ、その間に海岸線があったと思われる。向う側の海域だった所には水田が広がり畑地もある。隅田川沿いには湿地帯も残っている。豊島村・上尾久村・下尾久村・町屋村・三河島村等集落の場所は相対的に高い所だが、1100 年海進頂点期には海の中か洲あるいは島だった可能性が高い。日暮里村の台地の切れ目辺りまで海域は入り込んでいた。直線的に東南に向かってきた海岸線は、その辺りから湾曲して北東に向かい通新町辺りに延びている。湾曲した内側＝北側が海だったが、迅速図では谷中本村・金杉村があり、その北方に三河島村がある。金杉村の水田に囲まれた池は 1100 年海進期の海域の名残であろう。陸の突き出した部分には根岸の地名がついている。海域が広がった時期にも長く陸地を維持していたのでついた地名であろう。この湾曲線は往時の海岸線にほぼ一致すると考えられるが、台東区と荒川区との境界線にほぼ重なるとか、石神井用水と並行している等、その後の土地利用に影響を与えているようだ。明暦 2 年（1656）開削とされる石神井用水は石神井川から分派し南に向かう用水で多くの村を灌漑し「二十三ヶ村組合用水」と呼ばれた³³。その水路との関係で 1100 年海進期の海岸線を示す。安政江戸近郊図と迅速図でみると、分派直後の飛鳥山下を流れる段階では海岸線より離れた高い所をほぼ平行に流れ、次第に 1100 年海進期の海岸線に近い高さで沿う形となり海拔と同高度になるのが青



地図 12 石神井川用水（安政 4 年作、安政江戸近郊図、古地図史料出版株式会社）

雲寺の崖下辺りということになる。その後は1100年期の海拔以下となって隅田川に流入する。最後の線は新吉原の土手と並行する日本堤沿いの南東への流れである。日本堤は近世初期に築かれたものだが、海退過程の一定期間海岸線を守る堤防線だったのではないか。

註

- 1、拙稿「1100年海進における「埼玉の海」」(『大東文化大学紀要』第60号人文科学2022年2月)。
- 2、貝塚爽平『東京の自然史』(紀伊國屋新書、1975年第二版)12頁。
- 3、『新編武蔵風土記稿』(2) 荏原郡奥沢村(歴史図書社)408頁。
- 4、陸地測量部明治14年測量同18年製版同二十年出版同二十四年再版)2万分1「二子村」。
- 5、貝塚爽平『東京の自然史』(紀伊國屋新書、1975年第二版)68～69頁。
- 6、陸地測量部明治14年測量同18年製版同二十年出版同二十四年修正再版2万分1「品川驛」。
- 7、註4参照。
- 8、拙稿「円覚寺領尾張国富田莊絵図に見る海水面変動」(『大東文化大学紀要』第44号〈人文科学〉平成18年3月)。
- 9、『角川日本地名大辞典13東京都』458頁。
- 10、註6の2万分1「品川驛」と註4の2万分1「二子村」を参照。
- 11、『角川日本地名大辞典東京都』228頁「唐ヶ崎町〈目黒区〉」。
- 12、『角川日本地名大辞典13東京都』702頁。
- 13、大橋方長(八右衛門)『武蔵演路』。安永九年の序。(新編埼玉県史資料編10、537頁)。
- 14、『新編武蔵風土記稿』(2)471頁。
- 15、『角川日本地名大辞典13東京都』478頁。
- 16、目黒区のインターネット「歴史を訪ねて 東山貝塚遺跡」から。
- 17、明治十三測量同十九年製版同二十年八月二十六日出版同二十四年修正再版同年六月二十七日更改出版、2万分1「内藤新宿」。
- 18、『中央区の歴史』(名著出版昭和54年9月)41頁。
- 19、新編埼玉県史資料編10、53頁。
- 20、新編埼玉県史資料編10、56頁。
- 21、『新宿区史』39頁「中世新宿区地域の部落名」図。
- 22、『神道大系神社編十七武蔵国』181～182頁。
- 23、陸地測量部、明治13年測量同19年製版同23年再版2万分1 麴町区。明治13年測量同19年製版同20年8月26日出版同24年修正再版同年6月27日更改出版2万分1 下谷区。
- 24、『角川日本地名大辞典13東京都』台東区910頁。
- 25、『角川日本地名大辞典13東京都』台東区910頁、912頁。
- 26、『新編埼玉県史資料編10、近世1地誌』526頁。
- 27、『武州豊島郡平塚郷上中里村平塚大明神の社并別當城官寺縁起』中卷(精興社「神道大系 神社編十七 武蔵国」所収334頁)。
- 28、『新編埼玉県史資料編10、近世1地誌』解説。
- 29、阿蘇海に堆積するカキ殻の回収運動／京都府ホームページ。
- 30、江戸川河川敷事務所 占用調整課水谷大悟「江戸川放水路におけるカキ殻放置問題の解決に向けて～法解釈に囚われない地元協働での“回収作業”という手法～」。
- 31、註27参照。
- 32、註23、2万分1「下谷区」参照。
- 33、『新編武蔵風土記稿』(2)307頁「一ハ王子村石堰ヨリ十間許上流ニテ分派シ、飛鳥山下ヲ流レ西ヶ原梶原堀ノ内田端新堀三河島金杉龍泉寺山谷橋場數村ヲ歴テ淺草川ニ達ス。其近郷二十三村ニ引注ク故直ニ二十三ヶ村用水ト名ツク」。